（公社）日本鍼灸師会　全国大会 in 愛知大会レポート

シンポジウム３：「ヒトを診る」
講　師：伴　信太郎（愛知医科大学　特命教育教授　総合診療医）
　　寺澤　佳洋（口之津病院総合診療医・鍼灸師）
　　馬場　道敬（経絡治療学会　副会長）
　　藤本　新風（北辰会　代表理事）
報告者：荒木善行（研修委員会）

今回の大会テーマでもある「ヒトを診る」について、総合診療学の第１人者である伴信太郎先生、総合診療医であると共に鍼灸師でもある寺澤佳洋先生、経絡治療の第 1 人者である馬場道敬先生、中医学をベースとした北辰会を率いる藤本新風先生、東西医学のベテランと若手の 4 名のシンポジストが前半それぞれの視点から述べ、後半はディスカッションへと発展しました。

まず伴先生は、総合診療医の理念とアプローチの仕方を説明されました。次に寺澤先生が鍼灸師にとって家庭医療学を学ぶことの重要性と「ヒトを診る」際に役立つ手法やテクニックを紹介されました。続いて馬場先生が、経絡治療の実際を診断・選穴・補寫・治療の項目ごとに説明され、正しい選穴と正しい治療量が重要であり、病の根本解決に対する鍼灸治療こそが「ヒト診る」ことになると纏められました。最後に藤本先生が中国伝統医学の立場から、まず「ヒト」とは全人的（生物学的・心理学的・社会学的）な意味を含んでいて、鍼灸師が全人的に「ヒト」を診るには「気一元」のスタンスに立つことが重要で「対人援助者」としていかにあるべきかを考える必要があると述べられました。

後半のディスカッションでは、「安心」と「不安」というキーワードが何度も出てきました。

パネリスト４人それぞれの立場は違いますが、「ヒトを診る」ということは、病や症状だけを診るのではなく、ヒトそのものを診る(全人的）ことが重要であり、それを実践するには、失敗も含めた経験と本シンポジウムで学んだテクニックがあれば可能であるとの見解でありました。また、「安心」を与え、「不安」を取り除いてあげることも重要であると本シンポジウムを締めくくられました。